

風疹と子宮頸がんの予防接種の受療行動への影響因子の検討

和田千津子¹⁾、岡本左和子¹⁾、康原夏子¹⁾、濱田美来²⁾、尾花尚哉²⁾、今村知明¹⁾

1) 奈良県立医科大学健康政策医学講座
2) 株式会社三菱総合研究所²⁾

目的

1. 子宮頸がんの予防接種についての意識調査
2. 風疹の予防接種についての意識調査
3. 子宮頸がんと先天性風疹症候群(CRS)を予防するためのリスクコミュニケーションに必要な要因の考察

▶ 2

背景

- ▶ 子宮頸がんの若年層の罹患率が増加傾向にある
 - ヒトパピローマウイルス(HPV)の感染が、子宮頸がんの発生に関係している
 - HPVワクチン接種により、発生リスクを減少させることができるが、接種率は低下している
- ▶ 風疹の流行年には先天性風疹症候群(CRS)発生の増加がみられる
 - 風疹は予防接種により免疫の獲得が可能である
 - 予防接種の未接種者や抗体価の低い人がいると考えられる

▶ 3

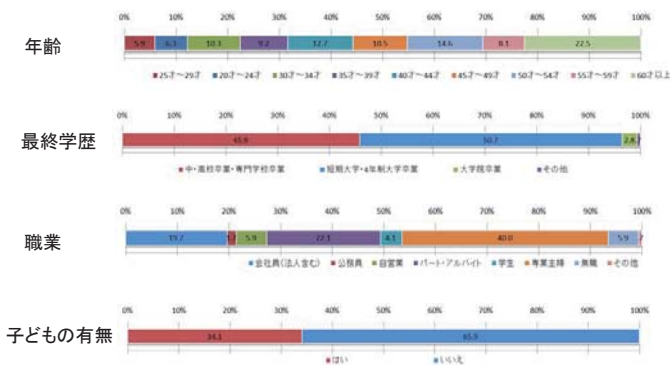
方法

- 調査方法: インターネットによるアンケート調査
- 実施期間: 2014年3月11~3月31日
- 調査対象: 20歳以上の女性1,775名(医療従事者は除く)
- 有効回答数: 458(25.80%)
- 調査項目
 - 基本情報: 年齢・職業・学歴・未成年の子供の有無
 - 子宮頸がん・風疹の予防接種に伴うリスクの認知・確認行動、リスクの情報提示による接種意向、意思決定のための因子、医療のリスクに対する認識など
- 分析方法: 対象の特性を把握し、基本情報とアンケート結果に重回帰分析と一元配置分散分析を実施
- 解析ソフト: IBM社, SPSS 21.0

▶ 4

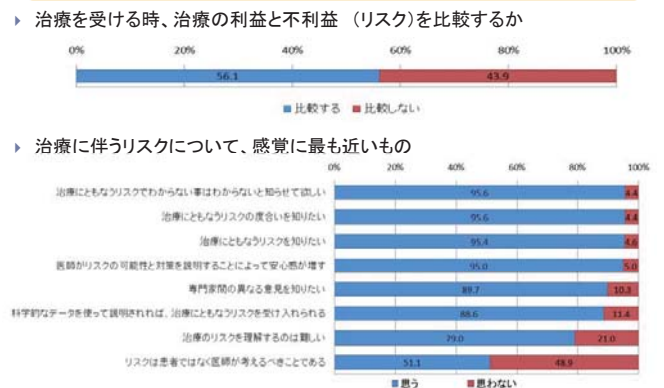
結果 (1) 対象の基本属性

- 平均年齢: 46.7歳
- 最終学歴は、短大・4年制大学卒業と中・高校・専門学校卒業がほぼ同じ
- 40歳以上では専業主婦が多く、20~24歳は学生が最も多い
- 未成年の子供を持つのは全体の34%



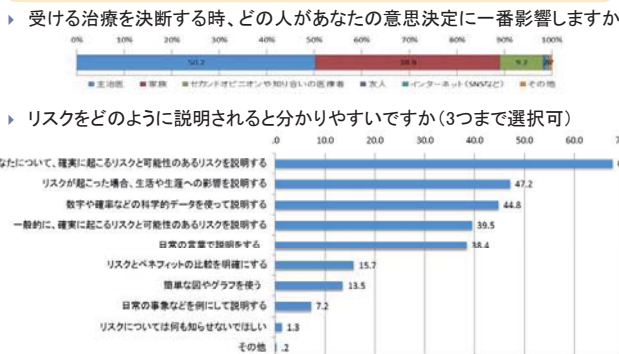
結果 (2) 医療のリスクに対する認識

- 半数以上が利益と不利益を比較する
- リスクに対しては、「わからない事はわからないと知らせて欲しい」、「治療に伴うリスクやリスクの度合いを知りたい」、「医師がリスクと対策を説明することによって安心感が増す」とほとんどが感じている
- 「リスクは医師が考えることである」も半数は感じている



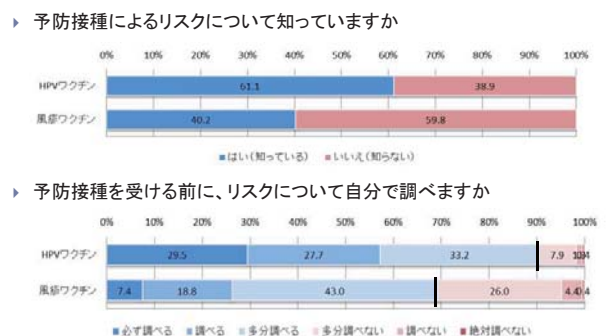
結果 (3) リスクの受容への影響

- 治療の意思決定には、主治医と家族が影響を及ぼす
- リスクについての説明は、「自身について起こりうるリスク」や「リスクが起こった場合の生活への影響について」説明されると分かりやすいとの回答が多く、そのほか、「日常の言葉を使用する」、「一般的に起こるリスクについて」、「科学的データを使用して説明」されると、分かりやすい



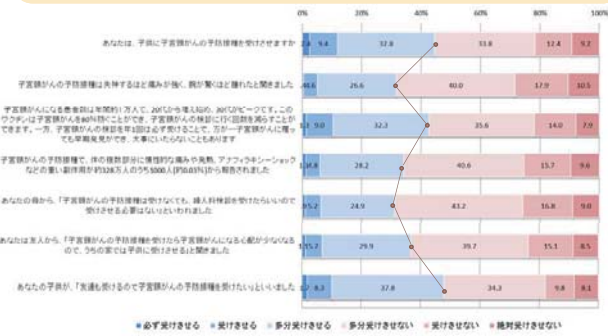
結果 (4) 予防接種のリスクの認知と確認

- 子宮頸がん(HPV)ワクチンは61%、風疹は40%の人がリスクを知っていると回答し、風疹と比べHPVワクチンのリスクの認知は高い
- HPVワクチンは90%の人が接種前にリスクを確認すると回答し、風疹に比べリスクへの関心が高い。



結果（5）HPVワクチン接種への回答

- 接種意向は情報にかかわらず低く、行動変容は小さい(44.5%~31.7%)
- 「必ず受けさせる」「受けさせる」「多分受けさせる」を合わせた回答(以下、「受けさせる」の合計)は、情報提示前と有益性を提示した時が多く、失神するほどの痛みや腫脹、重度の副作用の情報で減少
- 他者の影響では、母が「受けさせる必要はない」といった時に最も受けなくなり、「受けさせる」が最も多かったのは子ども自身が「受けたらいい」と言った時であった



結果（6）風疹ワクチン接種への回答

- 接種意向は情報に関わらず約60%であり、リスクの情報による行動変容は小さい(60.7%~65.7%)
- 「必ず受ける」「受ける」「多分受ける」を合わせた回答が最も多かったのは、CRSの発症リスクを提示した時で65.7%であった
- 母が「受けなくてもいい」といった時は、「受けたくない」とする回答が著しく増加し、その後、友達が「受けた方がいい」と言っても回復しない



結果（8）風疹ワクチンの情報による接種意向

- 風疹ワクチン接種による軽度・重度の副作用の情報での接種意向は、年齢・学歴に有意差がみられた
- CRS発生のリスク情報による接種意向は、年齢・学歴・子供の有無に有意差がみられた
- 妊娠の可能性のある家族との同居・母親の「受けなくてもいい」という意見、友人の「受けた方がいい」という意見による接種意向は、年齢に有意差がみられた

項目	重回帰分析			
	年齢区別	最終学歴	子供の有無	職業
情報提示前の風疹ワクチンの接種	0.111	0.099	0.054	0.535
軽度副作用(無菌性髄膜炎)の情報	0.000**	0.001**	0.677	0.525
接種しない場合のリスク(CRS発生)の情報	0.038*	0.013**	0.028*	0.477
重症副作用(血小板減少性紫斑病)の情報	0.002**	0.011**	0.193	0.532
妊娠の可能性のある家族との同居	0.022**	0.218	0.869	0.833
母親の「受けなくてもいい」という意見	0.014**	0.149	0.500	0.383
友人の「受けた方がいい」という意見	0.007**	0.223	0.864	0.120

表内の数値は有意確率(p値) 信頼区間95%
*p<0.05, **p<0.01

結果（9）風疹ワクチンの接種意向に対するリスク情報と年齢区別の比較

- 軽度の副作用の情報提示後は、45~49歳と25~34歳の間と60歳以上の対象と25~34歳、40~44歳の間に差がみられた
- CRSのリスク・重度の副作用の情報提示後は、60歳以上と25~34歳の間に差がみられた

項目	平均値	年齢								ANOVA F値
		20~24才	25~29才	30~34才	35~39才	40~44才	45~49才	50~54才	55~59才	
軽度副作用(無菌性髄膜炎)の情報	2.93	2.81	2.94	3.02	3.05	3.58	3.13	3.41	3.55	4.281**
接種しない場合のリスク(CRS発生)の情報	3.31	2.52	2.68	2.76	2.83	3.31	3.12	3.03	3.47	3.471**
重症副作用(血小板減少性紫斑病)の情報	3.14	2.96	2.96	2.88	3.00	3.56	3.25	3.46	3.59	3.751**
妊娠の可能性のある家族との同居	2.97	3.11	2.91	3.00	3.17	3.58	3.21	3.27	3.35	1.873
母親の「受けなくてもいい」という意見	3.69	3.96	3.94	3.67	3.93	4.17	4.15	4.05	4.07	1.699
友人の「受けた方がいい」という意見	3.48	3.59	3.51	3.40	3.64	3.94	3.75	3.78	3.81	1.635

**p<0.01

結果(10) 風疹ワクチンの接種意向に対するリスク情報と学歴、子供の有無の比較

- 軽度の副作用・CRSのリスク・重度の副作用の情報提示後は、中学・高校卒業・専門学校卒業と短期大学・4年制大学卒業の間に差がみられた

項目	平均値	最終学歴				子供の有無		ANOVA F値
		中・高校卒業・専門学校卒業	短期大学・4年制大学卒業	大学院卒業	その他	いる	いない	
軽度副作用(無菌性髄膜炎)の情報	3.44	3.04	3.08	2.67	6.30**	3.11	3.28	3.09
接種しない場合のリスク(CRS発生)の情報	3.29	2.89	2.77	3.00	3.88**	2.82	3.20	9.30*
重症副作用(血小板減少性紫斑病)の情報	3.44	3.12	3.00	2.67	3.79*	3.08	3.35	6.07*

*p<0.05, **p<0.01

考察（1）

- ▶ リスクを理解するには、科学的データを活用し、対象自身に起こりうるリスクについて、また、そのリスクが起こった場合の生活への影響・対処法についての説明が網羅されていなければならない。
- ▶ 子宮頸がんの予防接種に対するリスクの認知は高く、重篤な副作用の報道による影響が考えられる。
- ▶ 子宮頸がんの予防接種に対する接種意向は低い。接種による不利益な情報が周知され、新しい情報が受け入れにくくなっていると考えられる。

考察（2）

- ▶ 子宮頸がんの予防接種には子ども本人の意思が尊重されることが示唆された。対象年齢の子どもが適切に判断できるための情報提供の必要性が考えられる。
- ▶ 風疹の予防接種はリスクの認知が低いが、接種意向は高く、リスクを認知したうえで接種するためのリスクコミュニケーションが必要と考える。
- ▶ 風疹の予防接種の受療行動には母親の意見が影響することが示唆された。

結論

- ◆ 予防接種の意識について
 - ◆ 子宮頸がんの予防接種に対する抵抗感は強い。受療行動には子ども自身の友人の影響が大きい。
 - ◆ 風疹の予防接種に対するリスクの認知は低く、接種意向との乖離がみられる。また、接種には母親の意見が大きく影響する
- ◆ リスクコミュニケーションとして
 - ◆ 子宮頸がんの予防接種は、受療適齢期に応じたリスクコミュニケーションが必要である。
 - ◆ 子宮頸がんの罹患率低下のために、検診の時期や受療を促進する方策などの検討が必要と考える。
 - ◆ 風疹の予防接種のリスクを理解するための情報提供とともに、結婚・妊娠適齢期の親世代へのリスクコミュニケーションの検討が必要である。

謝辞

- ◆本研究は平成26年度科学研究費助成事業
(学術研究助成基金助成金)
基盤研究(C)「患者の医療リスクの理解と納得のため
の要因と行動変容までのプロセスに関する研究
(26460610)」の一環として実施したものである

ご清聴ありがとうございました

